

# 子どもたちの読む力を育む国語科の学習指導

## — 文学的文章を扱う際に教師が行う授業準備に関する一考察 —

田中美紗貴 水戸部修治  
(発達教育学研究科) (教育学科教授)

小学校国語科「読むこと」の授業実践に際し、当該単元で目指す資質・能力を確実に育成するためには、言語活動をどのように位置付け、授業準備段階でどのような手立てが必要になるのかを明らかにした。具体的には小学校第2学年の文学的文章を読むことにおいて、「モデル動画の制作と活用」、「並行読書材の準備と活用」、「教師によるゴールモデルの例示」の3点を取り上げ、それらの手立てを実効性のあるものとすべく詳細な検討を試みた。その結果、言語活動を真に有効なものとするためには、これらの手立てを、指導のねらい及び児童の意識に即して展開することが重要であることを明らかにした。

キーワード：小学校国語科，言語活動，モデル動画，並行読書，教師モデル

### 1. 研究の目的

学習指導要領における言語活動の位置付けとして、平成以降では、平成10年版学習指導要領の「第3指導計画の作成と内容の取扱い」に言語活動例が示され、平成20年版、29年版では内容の(2)に各領域の言語活動例を示している。「話すこと・聞くこと」や「読むこと」の領域においては、こうした言語活動を明確にして授業構想が進められている。一方で「読むこと」においては、必ずしもその位置付けが明確ではなく、言語活動自体が不明確であったり、最後に付加的に添えられているだけになったりしていることも多い。

国語科において育成を目指す資質・能力を確実に育むという言語活動の本来のねらいを実現するためには、単元に位置付けた言語活動を、単発のものとしてせず、その過程で行うべき学習活動を明確にした授業構想と実践を進めることが求められる。

そこで本研究では、児童たちの読む力を育むことを目指して、「読むこと」における適切な言語活動を位置付けた国語科の授業を実現するために必要な準備が何かを明らかにすることとす

る。具体的には、小学校第2学年の授業実践に向けた授業構想を通し、その準備の在り方を詳細に検討し、必要な配慮点を明らかにすることを目的とする。

### 2. 本研究の方法

小学校第2学年において行う国語科「読むこと」の文学的文章の授業実践に向け、授業を構想する。この授業構想を通じて、以下の3つのことについて検討を行う。

(1) 準備をする意義

(2) 準備方法

(3) 準備におけるポイント

なお本論考において考察対象とする授業の準備内容としては、モデル動画、並行読書材、言語活動の教師自作のモデルの3つを取り上げる。

### 3. 授業構想の概要

構想する授業は、第2年生の文学的文章の教材「みきのたからもの」(光村図書)を中心的な学習材とした単元である。この授業では、言語活動として、「もしもボックス」(後述)を位置付けた授業構想を以下の通り進めた。

表1 小学校第2学年単元構想

<p>(1)単元目標</p> <p><b>【知識及び技能】</b></p> <p>・もしもボックスで大好きなお話を紹介することに向けて、読書に親しみ、いろいろな本があることを知ることができる。（拠り所となる学習指導要領の指導事項は（3）エ（以下、記号のみ示す））</p> <p><b>【思考力・判断力・表現力等】</b></p> <p>・もしもボックスで大好きなお話を紹介することに向けて、大好きな場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像することができる。（Cエ）</p> <p>・もしもボックスで大好きなお話を紹介することに向けて、文章の内容と自分の体験とを結び付けて、「もしも自分がそのお話の登場人物だったら」「もしも自分がそこにいたら」を考えることができる。（Cオ）</p> <p><b>【学びに向かう力・人間性等】</b></p> <p>・進んで並行読書材を読み、物語の大好きな場面に着目して「もしも自分がそのお話の登場人物だったら」「もしも自分がそこにいたら」を粘り強く考え、積極的に他者に伝えることができる。</p> <p>(2)言語活動とその特徴</p> <p>言語活動には、もしもボックスを位置付ける。（後掲の写真参照。）児童が選んだ大好きなお話について、①もしも自分がお話の登場人物だったら、②作品名と作者、③お話のなかの大好きなところ、④その理由、⑤もしも自分が大好きな話の登場人物だったらどうするのかをそれぞれカードに書き出して、小箱に入れて紹介できるようにするものである。</p> <p>この言語活動ツールの③と④が思考力・判断力・表現力等の指導事項C（エ）、⑤がC（オ）に対応している。このことで、もしもボックスにまとめていく過程で、ねらいとする資質・能力を確実に育成しようとするものである。</p> <p>(3)単元計画</p> <p>提案する授業では、単元のゴールに向けて学習に取り組むことができるよう、以下のような学習の流れを提案する。</p> <p>0 時間目：学習が始まるまでに並行読書材を読み、並行読書材マトリクスにシールを貼る</p> <p>1 時間目：もしもボックスで大好きなお話を1年生に紹介するという単元のゴールに向けて、教師自作のもしもボックスのモデルを使用して学習計画を立て、学習の見通しをもつ。</p> <p>2 時間目：教科書教材「みきのたからもの」を読み、ワークシートを使用してあらすじを確認する。</p> <p>3 時間目：選んだお話のあらすじをワークシートを使用して確認する。</p> <p>4 時間目：教科書教材の大好きなところとその理由を交流を通してはっきりさせて、カードに記入する。</p> <p>5 時間目：選んだお話の大好きなところとその理由を交流を通してはっきりさせて、カードに記入する。</p> <p>6 時間目：教科書教材の大好きなところでの「もしも自分だったら？」を考えて、カードに記入する。</p> <p>7 時間目：選んだお話の大好きなところでの「もしも自分だったら？」を考えて、カードに記入する。</p> <p>8 時間目：もしもボックスの紹介に向けて、もしもボックスを完成させる。</p> <p>1年生に紹介することに向けて、練習をする。</p> <p>9 時間目：発表会で、大好きなお話を1年生に紹介する。</p> <p>10 時間目：並行読書材の中で紹介を聞いて読みたいと思った本やもう一度読みたいと思った本を読み、学習のまとめをする。</p>
--

4. 授業実践に向けた準備の具体的内容

(1) モデル動画の制作と活用

甲斐（2022）は、大村はまの読書会における

話し合いの実践に関していわゆる台本型手引きを用いた指導の工夫に着目し、「話し合いが事前に配布された手引きに基づいて行われたもので

あるということが、第二学年を対象とした本単元における話し合いの特徴である。実際に学習者は手引き『だれに話そうか、だれに話してもらおうか』に基づく質問をし、それに対する応答をしている様子が見える。」(p.110)とし、話し合いの手引きを提示することの重要性を指摘している。

児童のペア交流に際しても、対話のモデルを鮮明に描き、モデルとして提示することは極めて有効であると考えられる。大村の時代には用いることが難しかった映像でのモデル提示は一層有効なものとする。

モデル動画の意義は、児童に視覚的に交流の仕方を伝えること、教師が児童の実態をつかみ、具体的に交流の様子を想像することである。板書を使用して交流の流れを確認するだけでは想像をすることが難しい実際の交流中のやり取りや並行読書材等の使い方を動画で確認することで、児童は交流の仕方を想像しやすくなる。

また、教師はモデル動画撮影の準備をすることで、めあてとする力を身に付けるために交流でどのような話ができたらよいかを確認すること、動画を撮影することで、児童の実態に応じた交流になっているかを確認できる。

本研究で作成した学習指導案では、児童が考えをはっきりさせたり、他の児童の考えから考えを広げたりできるように、全10時間の授業のうち、2時間目から7時間目まで交流の時間を設定した。この交流に際し、ペア交流のモデル動画を、以下の5つの手順で準備した。

- ①学習指導案を作成し、めあてとする力を明確にした上で言語活動を決定する。
- ②モデル動画の台本を用意する。
- ③モデル動画を撮影するために必要な機材、人員を確保する。
- ④モデル動画を撮影する。
- ⑤モデル動画を編集する。

はじめに、①について検討する。モデル動画は、使用する単元の学習内容に応じて撮影する必要がある。なぜなら、単元によって、身に付けることを目指す力が異なることに加え、設定する言語活動も変わるからだ。また、児童も学

習を進めていくにつれて実態が変わってくる。そのため、これまでの学習で使用していたモデル動画を使うことは難しい。ここから、学習指導案を作成し、単元で身に付けさせたい力をはっきりさせること、そしてその力を身に付けることができるような言語活動を設定し、学習計画を立てることが最初に必要となる。

次に、②について検討する。①で単元で身に付けさせたい力と言語活動が決定できる。これを踏まえ、モデル動画を撮影するための台本を用意する。台本を用意することで、授業者は交流の様子を具体的に想像することができる。また、単元の目標を達成するためにどのようなやりとりが必要となるかを確認することにもつながる。加えて、モデル動画を作成する際に協力してもらう人に対し、どのような言動を求めているのかを示す際にも役立つ。今回提案する学習指導案で行う授業で使用することを想定した交流のモデルでは、図1のような台本を用意した。

③については、モデル動画では主にペア交流の様子を提示する。そのため、交流モデルとなる児童役二人が必須となる。撮影に際しては、カメラ、三脚等のカメラを固定する機材があるならば人員は必須ではない。しかし、図1(a)では、児童が並行読書マトリクスから交流相手を決定し、席につき、交流を開始するまでを撮影し、図1(b)(c)では児童役が教材を指し示すところから児童の表情を映すこととしている。これは、撮影対象を身に付けたい力に応じて変えているためだ。このことを考えると、撮影者もいることが望ましい。そのため、カメラ等の撮影機材、撮影者と動画に登場する児童役二人の合計三人が必要といえる。

④については、交流の流れとして決まっている部分と、身に付けさせたい力に応じて撮影する対象が変化する部分がある。図1でいうと、(a)は変化しないもの、(b)(c)は変化するものだ。なお図1で示しているものは、単元計画の中の6・7時間目で使用する予定のものである。(a)は交流の冒頭部分で、並行読書マトリクスを使用して、目的に応じて児童が交流相手を決

<p>1. 自分だったらどうするかがはっきりしない</p>	
<p>並行読書マトリクス(または全文掲示)のところに行く                  A「好きなところは選べたから、自分だったらどうするかを考えたいな。」                  (マトリクス or 全文掲示見る)                  「同じ本を読んでいる(同じところを選んでいる)のはBさんだ!Bさんと話してみよう。Bさん一緒にやろう。」                  B「うん、いいよ。どこですか?」～AとB席に移動</p>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin: auto;">(a)</div>
<p>A「私から話すね。」                  B「うん。」(選んだ本(または教材文)を机の真ん中に置く)                  A「私が大好きな場面はここだよ。一緒に読もう。」～AとBで文を指さしながら一緒に読む                  B「どうしてここが好きなの?」                  A「～だから好き。」</p>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin: auto;">(b)</div>
<p>B「いいね。Aさんだったらどうする?」                  A「まだ考えられてないんだよね。」                  B「Aさんは今までこの登場人物と同じようなことはあった?」                  A「うん。～っていうことがあった。」                  B「じゃあ、Aさんもこの場面だったら登場人物と同じようにするのかな。」                  A「同じようにするかもしれない!でも、～もするかも!なんでかっていうと、ここに、～って書いてあるから。～すると思うんだ。」(叙述に戻って言えるように)                  B「そうだね。私も～するかも!」                  A「ありがとう。じゃあ、次Bさんね。」                  終了</p>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 40px; margin: auto;">(c)</div>

図1 モデル動画の台本

めるシーンである。交流の目的は、その時間の児童の実態に応じて変化するため、撮影対象は交流の目的をもって交流相手を決めようとしている児童役と、児童がみている並行読書マトリクス(誰がどの作品を読んでいるかが一覧できるようにシールを貼るなどして掲示するもの。ペア交流相手を児童が判断して選ぶ際に用いる。)である。図1は6・7時間目で使用予定のモデル動画の台本のため、大好きなところでの「もしも自分だったら?」がはっきりしていない児童を想定している。そのため、A「好きなところは選べたから、自分だったらどうするかを考えたいな。」というセリフを設定し、このセリフを話しているときは、並行読書マトリクスの前にいる児童役Aを撮影する。そして、交流相手を決めるときには並行読書マトリクスで同じお話を読んでいる児童を探す。これは、同じお

話を読んでいる児童同士で交流することによって、悩んでいることに対して内容を知っている児童の考えを参考にしたり助言を得たりすることができるからである。そのため、児童役Aが並行読書材マトリクスで自分が選んだお話の列を指さしながら、選んだお話の欄にシールを貼っている児童を見つけて交流相手を決めていく様子を撮影する。この時は、児童役Aが交流相手を探している指と並行読書マトリクスを映し、児童役Bに交流相手を決めるところまでは並行読書マトリクスを映す。最後に、児童役Bに声をかけて交流しようとする誘い、席に移動していくときには児童役Aと児童役Bを映す。

(b)は、交流相手が決まって席につき、交流が始まったシーンである。このシーンでは、5時間目ではっきりさせた児童の選んだお話の大好きなところとその理由を話している。このと

き、冒頭の A「私から話すね。」 B「うん。」までは児童が顔を合わせて話しているところを撮影する。次に、児童役 A が選んだ作品を机の真ん中に置き、好きなところを紹介して、一番好きなところを児童役 B と一緒に読むところまでは選んだ作品と児童役の手元を映す。ここでは、お話をしている児童役 B の作品を机の真ん中に置いておくこと、児童役 A が選んだ作品が机の真ん中に置かれていないこと、児童役 A が選んだお話の大好きなところに着目することを示すために手元とその作品を映す。これは、お話をしている児童役 B の作品を交流する二人が見えるようにすること、指導事項 C(1)エの「場面の様子に着目する」を指導することを目指すためである。

好きな場面だと判断した理由を話す際には、単元の目標である〔思考力・判断力・表現力等〕C(1)「エ 場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること。」を指導するために、選んだお話の中の文章に基づいて理由を述べるようにしたい。そのため、理由を話す児童役だけを映すのではなく、児童役 A が文章や挿絵を指し示しながら理由を述べているところが視覚的にわかるようにするために、机の上も映る状態で撮影することが望ましい。

(c) は、この台本で作成するモデル動画を使用する学習ではっきりさせていきたい「もしも自分だったら？」について、児童役 B と一緒に考えをはっきりさせていくシーンである。ここでは、児童役 B が児童役 A に「A さんだったらどうする？」と〔思考力・判断力・表現力等〕の指導事項 C(1)「オ 文章の内容と自分の体験とを結び付けて感想をもつこと。」に対応する内容を質問している。この時間では、「もしも自分だったら？」をはっきりさせることを想定しているため、児童役 B は「A さんだったらどうする？」と質問をしているが、児童役 A の交流の目的は「もしも自分だったら？」をはっきりさせることだったため、「まだ考えられてないんだよね。」というセリフを設定している。それに対し、児童役 B は同じようなことがあったかを聞き、これまでの自分の体験と結び付けて想像することができるような質問をするように台本を

作成している。

交流のはじめでは多くの児童が「もしも自分だったら？」は考えられていないと想定され、交流が進んでいる中では「もしも自分だったら？」を考えられている児童と考えられていない児童が混在すると考えられるからだ。このシーンによって、考えられていない児童に対してどう交流を進めたらいいのかを示すことができる。また、児童が「考えられていない状態では交流ができない」と思わなくてもいいように、考えられていなくても交流を通して「もしも自分だったら？」をはっきりさせていくから問題ないことを示すためにもこのシーンがある。

そして、児童役 A がこれまでの経験を想起して「同じようなことがあった！」となった後、児童役 B がもう一度児童役 A が選んだ作品の世界に戻って、登場人物と同じように行動するかを問うている。これによって、選んだ作品の世界での「もしも自分だったら？」を考えることができる。ここまでの流れは、児童同士が作品の内容から少し離れて、自分の経験や考えたことを話しているため、机の上も映っている状態で児童がやり取りをしているところを撮影する。

最後には、児童役 A が作品の叙述を指さしながら「こう書いてあるから～するかもしれない」というセリフを設定している。これによって、想像だけでなく作品の内容から「もしも自分だったら？」を考えることにつながる。この様子を児童にも視覚的にわかるようにするために、児童役 A が作品の叙述を指さしたら、そこをズームして撮影し、児童役 B が共感をして児童役 B のお話に移るときには児童同士が話しているところを撮影する。

(a) (b) (c) については、それぞれ上記の通りに撮影する対象を変えている。

なお台本は、児童が生活の中で実際に話している言葉を想定して作成した。これによって、ただ発表だけをして終わるような交流ではなく、学習内容について普段の通りに話しながら一緒に考えていく交流であることを示すためだ。そのため、方言があるのならば、その地域の方言にすること、丁寧すぎる言葉遣いにはしないこ

とがよいと考える。

最後に、⑤について検討する。モデル動画の編集は、動画の撮影方法によって必要かどうかが変わる。例えば、図1(b)では、児童役Aが選んだ作品について話しているときはその作品を示している手元を映し、理由について話しているときは児童役Aと児童役Bを机の上も映るように撮影する。このとき、カメラの持ち方を工夫し、児童同士が話をしている様子を正面から映すときの状態を通常として、選んだ作品について話をしている手元を映すときは、動画が上下逆にならないようにするために、カメラを通常の状態から上下逆に持ちかえるか手首を動かす必要が出てくる。このように、動画が上下逆にならないようにカメラを持ちかえることができるのであれば、動画の編集は必要でない。しかし、児童役A・Bを机の向かい側（児童役A・Bの正面）から撮影し、そのままカメラを下に向けて選んだ作品を指さしているところを撮影した場合、作品が逆さまの状態に撮影されてしまう。この場合は動画の編集が必要となる。モデル動画を視聴したときに、文字や人物が上下逆にならないようにすることは、児童が集中して動画を見ることにもつながるからだ。

また、今回は動画に児童役が何をしているかテロップを入れることとした。例えば、(b)で児童役AとBが着席する前から児童役Aが自分の好きなところを紹介し始めるまで、動画に「さいしょにそうだんする人の本をつくえの中心におこう」というテロップを入れた。児童が動画を見たときに、何をしているのか、何がポイントかを確認できること、児童と交流のポイント等を振り返るときに役立てられるからだ。ただし、テロップについては、児童の実態に応じて編集で加えなくてもよいと考える。

上記のことを踏まえて、モデル動画を準備することについて「①準備をする意義」、「②準備方法」、「③準備におけるポイント」を以下の通りまとめる。

#### ①準備をする意義

- ・児童に視覚的に交流の仕方を伝えること
- ・教師が児童の実態をつかみ、具体的に交流の

様子を想像すること

#### ②準備方法

- ・学習指導案を作成し、めあてとする力を明確にしたうえで言語活動を決定する
- ・モデル動画の台本を用意する
- ・モデル動画を撮影するために必要な機材、人員を確保する
- ・モデル動画を撮影する
- ・モデル動画を編集する

#### ③準備におけるポイント

- ・使用する時間の学習内容に沿った内容の台本になっているか確認すること
- ・指導事項に応じて、撮影する対象物を変えること
- ・児童の実態に応じた言葉遣いにする
- ・動画の撮影方法に応じて編集をすること

#### (2) 並行読書材について

中央教育審議会(2025)の「論点整理」では、学習指導要領の現状について「教科書『を』教える授業、「本時主義」からの脱却に至っていない」といった課題を指摘している。(p.9)また今後の教育課程改訂の方向性として、①「主体的・対話的で深い学び」の実装、②多様性の包摂、③実現可能性の確保を打ち出している。(p.3)更には「好き」を育み、「得意」を伸ばすことがそれらの実現につながるとしている。(p.6)

多様な実態にある子供一人一人に深い学びを実現する上では、一律一斉に教科書教材のみを読み取らせることにとどまらず、一人一人が自ら本に手を伸ばして学び進めていく授業改善が重要になる。

本研究における授業構想では、本単元でのめあてとしている力を着実に身に付けることができるようにするために、教科書教材「みきのたからもの」以外に児童が関連する作品（並行読書材）を使用することとした。また、教科書教材に興味・関心を持つことができない児童もいると想定し、児童自身が興味・関心を持てる教材で学習に取り組むことができるようにすることも理由として挙げられる。今回並行読書材として選定した作品は、以下の表2の通りである。

表 2 本単元で使用した並行読書材

<ul style="list-style-type: none"> <li>・わんぱくだんのロボットランド(ゆきのゆみこ・上野与志, ひさかたチャイルド)</li> <li>・宇宙人がいた(やまだともこ, 金の星社)</li> <li>・おそうじロボットのキュキュ(こもりまこと, 偕成社)</li> <li>・かげパ(富安陽子, ひさかたチャイルド)</li> <li>・うちゅうじんだぞ おとうとうさぎ(ヨнна・ビヨルンシェーナ, クレヨンハウス)</li> <li>・かいじゅうてんとう(木村裕一, あかね書房)</li> <li>・さかなくん(しおたにまみこ, 偕成社)</li> <li>・みらいのえんそく(ジョン・ヘア, あすなる書房)</li> <li>・ある星の汽車(森洋子, 福音館書店)</li> <li>・AI ロボット, ひと月貸します!(木内南緒, 岩崎書店)</li> <li>・銀河鉄道の夜(宮沢賢治, 偕成社)</li> <li>・やせいのロボット むじん島のロズ(ピーター・ブラウン, 小学館)</li> <li>・妖怪ロボット(いとうみちろう, 永岡書店)</li> <li>・宿題ロボット, ひろったんですけど(トーマス・クリストス, あかね書房)</li> <li>・そらからきたこいし(しおたにまみこ, 偕成社)</li> <li>・星をつるよる(キム・サングン, パイインターナショナル)</li> <li>・びんからだしてごらん(デボラ・マルセロ, 光村教育図書)</li> <li>・びんにいれてごらん(デボラ・マルセロ, 光村教育図書)</li> <li>・びんのなかのゆめ(デボラ・マルセロ, 光村教育図書)</li> <li>・みらいのえんそく かざんのしまへ(ジョン・ヘア, あすなる書房)</li> <li>・未来からきたカメときょうりゅう(藤森たか子, 岩崎書店)</li> <li>・はかせのふしぎなプール(中村至男, 福音館書店)</li> <li>・星どろぼう(アンドレア・デイノト, ほるぷ出版)</li> <li>・きまぐれロボット(星新一, 角川書店)</li> <li>・地球さいごのおぼけ(北杜夫, 河出書房新社)</li> <li>・宇宙人のしゅくだい(小松左京, 講談社)</li> </ul>
---

<ul style="list-style-type: none"> <li>・あるひこねこね(高島那生, 好学社)</li> <li>・ぼくのさがしもの(たけうちちひろ, 出版ワークス)</li> <li>・まるごとちきゅうレストラン(チョーヒカル, PHP 研究所)</li> </ul>
--

授業で使用する教科書教材「みきのたからもの」が SF だったことから、SF に該当するものを中心に作品を選定した。また、並行読書材は、児童一人一人が手にした状態で学習に臨めるようにしたい。そのため、授業で想定するクラスの人数分以上は用意をするが、今回は SF 作品だけでは想定する学級の児童数分を用意できなかったため、ファンタジーに該当する作品もいくつか選定した。

並行読書材を準備する際には、①教科書で紹介されている作品を確認する、②インターネット上で絵本を紹介している web サイトを確認する、③書店を数店舗めぐり、児童書や絵本の棚から SF やファンタジーに該当すると考えられる作品を確認する、④図書館の蔵書検索で SF に該当すると考えられる作品を確認するという 4 つの方法で収集した。Web サイト等や蔵書検索を使用することは、どのような作品があるのかを確認することが容易にできることが利点である。また、書店や図書館に行くことで、確認した作品を実際に読んだり、検索では見つけられなかった作品を見つけたりすることができる。そのため、検索して授業で扱いたいと考える作品を確認してから、図書館や書店に行くことがよいと考える。

教科書で紹介されている作品以外の作品の選定は、長編作品を楽しむことができる児童、低学年向けの作品を楽しむことができる児童、時間をかけたら読むことができる児童、低学年向けの作品よりも文字数が少ない作品の方が楽しめる児童が一クラスに混在していると想定して行った。そのため、選定した作品以外にも作品を確認し、長編作品と文字数が少ない作品やページ数が少ない作品の選定量を調整し、教科書で紹介されている作品と同程度の文字数やページ数の作品が多くなるようにした。また、作品

の中には興味深く感じるタイトルの作品もあったが、実際に読んでみると、2年生の児童には難しいと考えられる内容の作品や、紹介する際に難しさを感じそうな作品もあった。そのため、準備をする際には、教師が選定した作品を一読しておくことが必要と考える。加えて、作品を一読しておくことで、児童の実態に合った作品を選定できるだけでなく、児童に並行読書材を紹介したり読むことを促したりするときにも役立つ。

上記から、並行読書材の準備について、①準備をする意義②準備方法③準備におけるポイントをまとめると以下の通りである。

#### ① 準備をする意義

- ・本を重ねて読むことで、繰り返して学習することになり、単元で身につけさせたい力を確実に身に付けることができるようにすること
- ・教科書教材に興味・関心を持つことができない児童が、興味・関心を持てた作品で学習に取り組むことができるようにすること

#### ② 準備方法

- ・教科書で紹介されている作品を確認する
- ・インターネット上で絵本を紹介しているwebサイトを確認する
- ・書店を数店舗めぐり、児童書や絵本の棚からSFやファンタジーに該当すると考えられる作品を確認する
- ・図書館の蔵書検索でSFに該当すると考えられる作品を確認する

#### ③ 準備におけるポイント

- ・教科書教材の内容を確認し、その作品のジャンルと同じものにするか、より幅を広げて作品を選定するか児童の実態に応じて検討すること
- ・児童の実態に応じた文字数やページ数の作品を選定すること
- ・児童の人数分以上用意すること
- ・作品を調べるだけでなく、授業者も作品を読んで内容を確認すること

#### (3) 教師自作の言語活動モデルの制作と活用

古賀（2018）は、「これまで、単元を通した言語活動では、学習の導入に教師が言語活動のモデル文を提示し、モデル文に向かって、児童は見通しをもって学習に取り組んできた。そのモデル文は既習の学習材をもとに、作成したものがほとんどであった。そのため、モデル文をそのままコピーしたような児童も少なくはなかった。」として、教師がモデルを作成することの重要性を指摘している。

本研究での授業構想においては、言語活動としてもしもボックスを設定した。もしもボックスは、図2のようなものである。



図2 教師自作の言語活動のモデル

教師が言語活動のモデルを自作することの意義としては、児童に視覚的に単元のゴールを示すことができる**こ図表目次項目が見つかりません**。と、児童の実態に応じたつくりになっているか確認できること、単元の目標に応じたものになっているかどうかを確認できることが挙げられる。

言語活動のモデルの準備については、以下の手順で行った。

- ① 単元の目標の決定
- ② 目標を達成するための言語活動の決定
- ③ 内容の詳細の決定
- ④ ワークシートの作成
- ⑤ 入れ物の調達
- ⑥ ワークシートへの記入

①について、言語活動は単元の目標を身に付

けることができるようにするために設定する。これは、平成 29 年告示小学校学習指導要領の国語科の教科目標に「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」(p.28)と書かれていることから言える。そのため、単元の目標を決めてからどのような言語活動を設定するか考える。

単元目標の決定後、②について考える。今回は〔思考力・判断力・表現力等〕の指導事項を C(1)オをメインの指導事項とした。そのため、「文章の内容と自分の体験とを結び付けて(C(1)オ)」考えることができるようにするために、「もしも自分だったら？」を考えることを位置付けた。「もしも自分だったら？」は、自分が選んだ作品の登場人物だったらどうするのか、そのお話の中に自分がいたらどうするのかを考えることとした。これによって、「自分だったら、～する。なんでかというところ…」というように、理由の部分で自分の経験とむずびつけて考えやすくなると考えたからである。しかし、どの場面でも機械的に体験と結び付けさせることをねらいとするものではない。そのため、「場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像すること」(C(1)エ)も指導することとし、児童が大好きなところを見つけ、その場面での登場人物の行動を具体的に想像して大好きな理由を考えることを言語活動に位置付けた。

これによって、作品の中で取り上げるところが自然と決まり、大好きなところでの「もしも自分だったら？」を考えることができる。このように、目標が複数ある場合には、どちらをメインで指導するのかをこれまでの学習内容を踏まえて選定することが必要となる。

言語活動の内容が決まったため、さらに③単元のゴールである紹介することに向けて必要な内容を詳細に決めていく。例えば、言語活動の名前を児童が意欲的に取り組みたいと思うような名前にする。今回は、「もしもボックス」という名前にした。これは、紹介に使用したものを学習の記録として小箱に保管しておきたいと考えたことと、指導事項 C(1)オに対応する内容

として設定した「もしも自分だったら？」から名付けた。また、アニメや映画で人気のあるドラえものの秘密道具にももしもボックスがあり、導入としてこのエピソードを使用することで、児童が興味を持てると考えたからだ。

そして、ワークシートを作成していくことを考えた際に、「もしもボックス」を紹介し終わったあと、さらに児童が気になったお話を読んだり、友人の「もしもボックス」を見たりするかもしれないと予想された。このとき、好きなどころとその理由、もしも自分だったらの3つについて書かれたものだけでは、どの作品を紹介したのかわからなくなる可能性があると感じた。そのため、作品の題名や作者も書く形式とした。

加えて、指導事項に対応する内容についても検討した。本単元では、「大好きなところ」という表記でいいのかどうか、「もしも自分だったら？」という表記で児童が取り組みやすいかどうかを考えた。このとき、教科書で既習の学習内容を確認した。これまでの学習で取り組んでいる内容と類似のものであれば、児童にとっては取り組みやすく、さらに学習内容を反復練習することにもつながるからだ。

内容が決定したら、それらを形にするための④ワークシートを作成する。今回は、canva を使用して、ワークシートを作成した。このとき、1つのワークシートに1つの内容になるように設定した。ボックスに入れることを考えたときに、児童が用意しやすいと考えられるお菓子の箱に入るサイズの手紙が A6 サイズであり、そのサイズには一つの内容しか書ききれないと考えたからだ。例えば、一つのワークシートに好きなどころとその理由を設定すると、ワークシートに記述する欄を作成したときに一つ一つの行が細くなってしまう(図3)。

2年生の児童が取り組むことを考えたとき、枠が細いと書きづらい可能性がある。また、国語の学習のため、ワークシートは縦書きに設定する。縦書きに設定したとしても、図3のように1枚のワークシートに2つの内容では、枠が細い。そのため、A6のワークシート1枚に1つ

の内容とした。また、児童が普段目にする字体である教科書体を使用することとした。こうしたことに配慮して作成したワークシートが図4である。



図3 モデルで使用するワークシート初期

ワークシートが出来上がったら、⑤入れ物の調達を行った。児童が用意しやすいと考えるお菓子の空き箱（紙の空き箱、缶の空き箱）をいくつか用意した。この中で、学習で使用する期間中、児童に提示したり、自由に児童が触ったりできるようにすることを考えたとき、耐久性のあるものを選定することが望ましいと考え、缶の空き箱を用いることとした。

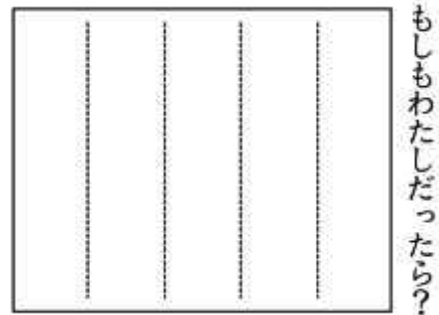
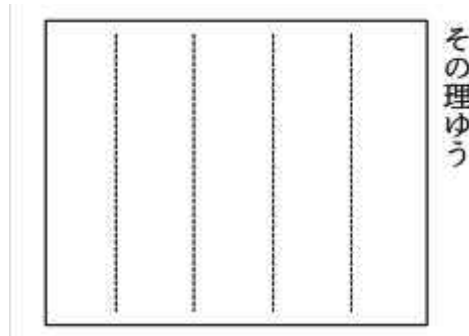
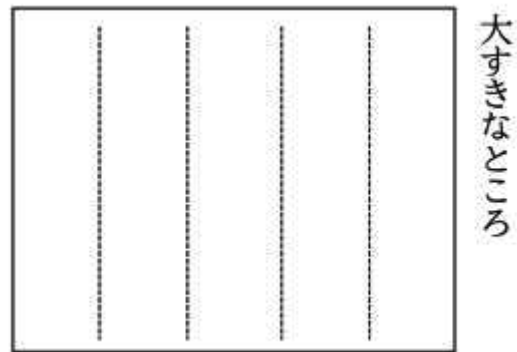
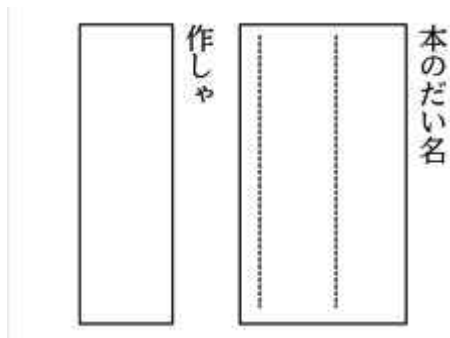


図4 言語活動のモデルのワークシート（4枚）

最後に、⑥ワークシートへ実際に選んだ作品についてモデル文を記入する。このとき、モデルとなる文章が、児童の実態に応じた書きぶりとなるよう注意する。また、書き進めていくうちに、ワークシートが取り組みやすいものとなっているか、紹介をするときに使いやすいかどうかを確認する。今回は、最初に作成したワークシートの枠が小さかったため、枠の大きさと行の広さを調整したことに加え、紹介をするときに、表紙の機能を担うものがあつた方がよいことに気づいた。そこで作成したものが図5である。

右端の四角には、作成者の名前を記入することとし、「もしも、」の枠には、「もしも、～だつ

たら。」と「～」の部分に登場人物の名前や作品の世界にいたらを入れることとした。これによって、誰が作成した「もしもボックス」なのかわかることに加え、「もしも～」があることで紹介のモデルや他の児童の発表を聞いている児童を話に引き込みやすくなると考えた。

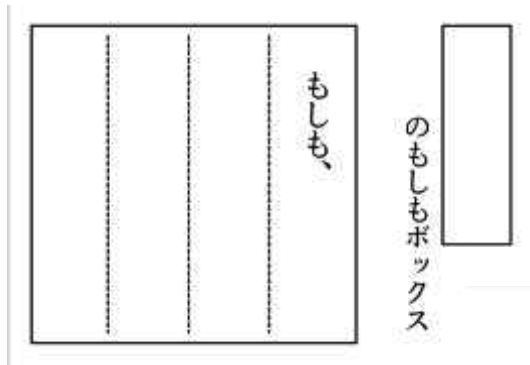


図5 言語活動のモデルの表紙

記入する際には、「大好きなところ」は、好きなどころを抜き出して書き、「その理由」は登場人物がしていることに着目して好きだと書いた例文を示した。これによって、大好きなところをそのまま写して書いてもいいことが視覚的にも伝わり、理由は登場人物の言動に着目して書くことが児童に伝えられる。また、「もしも自分だったら？」は、「私も（登場人物）と同じで…」とか「私は同じようなことはなかったけど、（登場人物だったら）…」と記入し、自分が同じことがあったのかなかったのかを基に考えられるようにした。これによって、指導事項のC(オ)を指導することにつながる。

こうした手立ての構想と実施を踏まえて、教師自作の言語活動のモデルについて、①準備をする意義②準備方法③準備におけるポイントをまとめると以下の通りとなる。

#### ①準備をする意義

- ・児童に視覚的に単元のゴールを示すことができること
- ・児童の実態に応じたつくりになっているか確認できること
- ・単元の目標に応じたものになっていて、単元計画がそれにあったものになっているかどうか

を確認できること

- ・ゴールが明確にわかることで、何を学んだらよいか具体的になり、児童が意欲を持つことにつながる

#### ②準備方法

- ・単元の目標の決定
- ・目標を達成するための言語活動の決定
- ・内容の詳細の決定
- ・ワークシートの作成
- ・入れ物の調達
- ・ワークシートへの記入

#### ③準備におけるポイント

- ・単元の目標を決定してから言語活動を考えること
- ・既習経験を踏まえて、今回位置付ける言語活動で使用できそうな既習内容を用いること
- ・児童の実態に応じてワークシート等を作成すること
- ・フォントを教科書体にする
- ・児童が用意しやすいものかどうかを考えて、言語活動で使用するものを検討すること
- ・実際にワークシートに記入してみる
- ・単元で身に付けさせたい力を身に付けられるようにワークシートのモデル文を書くこと

### 5. 考察とまとめ

本論で取り上げたモデル動画、並行読書材、言語活動の教師自作のモデルについては、いずれも児童が学習を行う際に視覚的に支援し、学習内容を具体的に把握するときに役立つものである。また、教師がこれらの準備をすることによって、児童の実態に応じたものになっているか、指導事項に基づいたものになっているかを確認することができる。今回準備を通して筆者が常に必要だと感じたことは、児童の実態に応じたものになっているかと指導事項を確実に指導できるようなものになっているかどうかである。準備を進めている際にも、この2点については何度も確認することが必要だと考える。

また、今回は筆者が架空の学級を想定して授業を提案したが、実際の学校では外国にルーツ

がある児童等もおり、実態は様々であると考えられる。そのため、並行読書材の選定にも日本語以外の言語の作品が必要となったり、モデル動画では字幕が必要となったりすることも考えられる。

加えて、授業準備をしてみて、実際の学校では協力を得られそうなものと難しいものがあると感じた。例えば、協力を得られそうなものとして並行読書材の準備がある。並行読書材については、学校図書館司書教諭や学校に所属されている司書の方、都道府県立図書館や市町村立図書館に協力を要請することも考えられる。上記のような協力を得られると、作品を探したり用意したりする際の負担が軽減され、並行読書材を使用する授業を実施する回数を増やすことができるようになる。反対に協力を得ることが難しいものとして、モデル動画の撮影協力があげられる。学校の先生方は日々多くの業務があるからだ。対応策としては、早めに必要となる用意をしておき、日程調整をお願いすることが考えられる。

一人で準備を進められる部分と協力を得ることが必要な部分を明確にし、周囲の協力を得ながら、児童が必要な力を身に付けられるような授業となるよう授業準備をすることが必要と考える。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な実現が求められる(中央教育審議会, 2021) 今日、児童自身が魅力的な言語活動のゴールに向かい、自律的に学習材を選択したり、交流相手を判断したりする学びが一層求められることとなる。しかしそれは自由放任とは異なる。また同時に、教師主導の一律一斉の発問中心の学習指導に戻るものではない。児童が自律的に判断できるようにするために、教師の出どころは、児童の判断の手掛かりを多様に提示することである。

本論考で考察したように、モデル動画一つとっても、指導のねらいや児童の実態、意識の在りように応じて様々な制作と活用上の留意点が浮かび上がってくる。しかし同時に、実践に当たってはそれらの準備を完全に整えてから授業に臨まねばならないと考えるより、授業実践に向けた準備や実践を通して改善を進めていくことにこそ大きな意味があるとも考えられる。

#### 引用文献

- 甲斐伊織（2022）「大村はま国語教室の読書会における話し合いの指導の展開―実践対象の相違による指導内容の変化―」.『早稲田大学国語教育研究』, 巻 42, p. 102-112
- 古賀太一朗（2018）「力をつけるモデル文にはどのようなものがあるか」.『佐賀国語教育』, 巻 2, p.68-76
- 中央教育審議会（2021）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」
- 中央教育審議会教育課程企画特別部会（2025）「論点整理」
- 文部科学省（2017）「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）」, p.28

#### 付記

本研究は、田中美紗貴による修士研究「子どもたちの読む力を育む国語科の学習指導～言語活動の過程で必要となる学習活動の追究～」の中で得られた授業における手立ての実践的開発に関する知見（執筆箇所 2, 3, 4 及び 1, 5 の一部）を、共著者である水戸部修治（執筆箇所 1 及び 5 の一部）と共に新たに書きまとめたものです。